

日本鳥類目録改訂に向けた第一回パブリックコメント

2021年2月18日

日本鳥類目録編集委員会

日本鳥類目録改訂第8版の2022年9月出版に向けて、第一回パブリックコメントをおこないます。今回は掲載種 (Part A) および外来種 (Part B) の検討についてのリストを公表し、属以下の分類 (和名、学名) および新規掲載種・検討種についてご提案させていただきます。何かご意見やご提案、追加情報などがありましたら 2021年4月末日までに本パブコメ専用のメールアドレス (mokuroku08pbc 'at' gmail.com ; 'at' は@マーク) 宛にお送りください。なお、個別へのご回答はいたしませんので、予めご了承ください。またこのパブリックコメントの目的は多数意見の調査ではありません。理由または根拠が述べられていないご意見に対しての検討はできませんので、ご意見には必ず理由または根拠をお書きください。

第二回パブリックコメントは、2021年9月～12月頃に、掲載種・亜種を確定して示すとともに、地域記録を公表し、3か月ほどの期間をとって意見を求める予定にしています。

属以下の分類 (学名) の考え方

現代の鳥の分類は、他の生物の分類と同様に、「自然分類」を目指しています。分類と学名は人類の自然史研究が積み重ねてきた学術的成果を土台として構築されたもので、その意味では最新の仮説であって、常に検証と修正が必要なものです。したがって学名は一般に言われているような不変なものではありません。とはいえ、ある物の名称が頻繁に変わっては利便性を損ないます。生物の分類は科学性と安定性のバランスの上に構築しなければならないものです。

日本鳥類目録は、初版 (1922年) の出版以来、唯一の日本の鳥類目録として、その分類は国内の公文書や図鑑などに広く利用されてきました。そのため継続性が重視されます。同時にグローバル化が進む今日にあって特に世界の諸鳥類目録との整合性も重要性を増しています。その上で、今日の鳥類学の最新の成果を反映させていくことが本編集委員会には求められています。

本編集委員会の種に対する概念は de Queiroz (1998, 2005) の General Lineage Metapopulation Concept (GLC) と一致し、種は自然界に実在するものと考えますが、種分化は形態やDNA、種認知など様々な生物学的特性が時間をかけてしだいにかつ順不同に分化していく過程としてとらえています。その進化の過程の中で種の境界を定めなければならないのが分類です。実際にどこに境界を定めるかは、分類学者ごとに異なる判断がありえますが、生物学的種概念を基礎とした Helbig et al. (2002) や Tobias et al. (2010) が、過去の鳥類分類との整合性も考慮すると現実的な提案の一つになって

きていると思います。

第8版改訂案での種の境界の見直しの例としてキジが象徴的です。日本鳥類目録では第4版(1958)以来、種キジについてコウライキジなどを亜種として含むものとして広義にとらえてきましたが(学名 *Phasianus colchicus*)、それは日本のキジとコウライキジの交雑個体が飼育下で完全妊性を示すこと(山階 1949)を重視した結果でした。しかし近年では鳥の雑種形成は自然条件下でも多くの種間で、以前思われていたよりも頻繁に起こることが知られるようになり(McCarthy 2006)、完全妊性は種を分ける根拠として以前ほどは重視されなくなってきました。第7版までは日本鳥類目録としての継続性を優先してきましたが、世界の鳥類目録との整合性や他のグループとの整合性を重視して日本のキジと大陸のキジとは種を分け、日本のキジを学名 *Phasianus versicolor* として日本固有種とすることを提案したいと思います。

属以上の分類は、起源を同じくする(相同な)形質のまとまりによってなされてきており、各分類群は表現型の特徴(Phenotypic Diagnosability)がはっきりしていることが必要です。自然分類または進化分類を考えたときに、単系統群だけを認めるか、あるいは側系統群も認めるかが分類学の大きな対立となってきましたが、ここではどちらの立場がより自然分類・進化分類といえるかという判断は棚上げにしたいと思います。しかし、属以上のレベルでは単系統群だけを認めるというのが世界的な趨勢としてますます定着しつつあると思われること、分類群の安定性の観点からも望ましいと思われること(Vences et al. 2013)から、属以上のレベルの分類群が、明らかな側系統群になることは避けるのが望ましいと判断しました。次に、属の境界を実際にどこに設定するかについてですが、その客観的基準はありませんので、利便性と安定性を重視すること、つまりあまり細分化されすぎないことが大切だと考えます。

亜種については、単に形態的に人が区別できる集団で便宜的なものとするという立場と、進化的に意味のある自然集団とするという立場との2つがありますが、日本鳥類目録は初版が出版されたときから考えると前者の立場から出発したといえます。歴史的には前者の意味で亜種を識別することで渡り鳥の移動ルート of 解明に役立つなどの利点がありました。しかし、分子系統の分析技術が発展し、また進化も考慮に入れた保全を目指す今日にあっては、後者が望ましくなっていることを感じます。ただ残念ながら多くの亜種は後者の意味でも亜種といえるか未だ検討されていません。

なお、学名の整合性を考慮した世界の鳥類目録は IOC World Bird List ver. 10.2, Howard and Moore Complete Checklist of the Birds of the World 4th ed, Handbook of the Birds of the World Checklist (HBW Alive) の3つです。

和名の考え方

和名には学名のような命名規約はありませんが、日本鳥類目録では、次の3点を原則として種和名と亜種和名を決めてきました。①亜種のない種(monotypic species)は、

種の和名をもつ、②その種に2つ以上の亜種がある (polytypic species) 場合でも、日本にその種の亜種だけが分布する場合は、種の和名と亜種の和名は同一である、③日本に2つ以上の亜種が存在する場合は (迷鳥も含む)、日本で繁殖する亜種 (2 亜種以上繁殖する場合は本州、特に本州中部以北の亜種)、もしくはいちばん普通な越冬亜種の和名は種の和名と同じとし、その他の亜種にそれぞれ別の亜種名を与える (その場合の亜種和名は、種の和名に形態的特徴か地域名を形容詞としてつける)。特に第6版以降はこれらの原則を強く意識し、ごくわずかな例外を除いてほとんどの亜種和名に厳格に適用してきました。しかし、いくつかの亜種名では不都合が表明されています。原則の適用が混乱を招くと判断される場合には、これらの原則 (特に③の原則) を機械的には適用せず、既に流布している和名を優先することにしました。

今回の改訂では、亜種のランク (階級) から種のランクに格上げされた分類群が、先述のキジ以外にも多数あります。利便性を重視して種の和名はできるだけ短くし、修飾語を減らすのが良いという考えがあり、過去には、シマセンニュウの亜種ウチャマシマセンニュウを第6版で種に格上げする際に種和名をウチャマセンニュウにした例やメボソムシクイの亜種コメボソムシクイを第7版で種コムシクイにした例などがあります。他方、分類のランクが変わっても対象そのものが変わったわけではないので、亜種和名をそのまま維持するのが良いという考えもあります。本編集委員会は、亜種が種に格上げされる場合には、種の和名は短いのが望ましいとの考えを優先して提案させていただくこととしました。

リストに提案する種の分け方や学名、和名についてご意見があれば、理由とともにお寄せください。

掲載種と検討種の考え方

ある国や地域の鳥類目録を作成しようとする場合、その正確性・客観性と速報性にはトレードオフがあると考えられます。すなわち、確実かつ客観的に認められる記録のみを掲載しようとするれば、証拠となる標本や文献 (査読付きの学術報告) の存在が前提となります。しかし、特に一般のバードウォッチャー等にとって学術報告のハードルは低いとは言えません。この状況は日本鳥学会誌の「観察記録」カテゴリの創設や、多くの鳥学会会員による呼びかけなどにより、かつてより大幅に改善されていると思いますが、未だに多くの初記録種が学術報告されていない現状です。一方で、文献なしに目撃情報や撮影された画像を用いて種のリストを作れば、最新の記録に基づいた目録ができるかもしれません。しかし、その信頼性は低いものになりえますし、何よりも検証可能という科学の土俵にはのらないものになってしまいます。

日本鳥類目録ではそのバランスをとるため、時代に応じた基準が採用されてきました。第4版までは証拠となる標本があるもののみを採用してきたのに対し、第5版からは、証拠標本がない場合でも、写真や音声などの証拠に加えて学術報告されているものを採

用する基準を用いて掲載種が選定されました（森岡 2012）。第7版においては、掲載の根拠として図鑑や査読付きでない文献も含めて多くの種を新規掲載し（池長ら 2014）、より速報性を重視したものとなっています。しかし、掲載種の一部について同定結果やその根拠に疑義が生じる結果となってしまいました。

そこで、次の第8版の編集においては、今一度文献主義を徹底して正確性を重視し、第7版の掲載種のうち、根拠となる学術報告等が存在しない種・亜種についても掲載根拠となる文献の再検討を行いました。再検討にあたっては、根拠となる文献において、学術報告と同等の十分な検討が行われているかどうかを重視して掲載種の検討を行い、各種・亜種について以下のようにA～Dの各カテゴリに区分しました。

A: 7版掲載以降*1に査読付き雑誌に観察記録等が掲載されたもの。

→8版に掲載（オオジュウイチ、アメリカハイイロチュウヒなど）

B: 査読付き雑誌には掲載されていないが、計測値や画像などの情報をもとに、学術報告に相当する十分な検討*2が行われており、かつ同定に疑問が無いもの。

→8版に掲載（シロハラアカアシミズナギドリ、アメリカコアジサシなど）

C: 査読付き雑誌に掲載されておらず、不十分な検討しか行われていないもの。あるいは分類学上疑問がある亜種。

→8版で検討種・亜種として掲載（前者はマンクスミズナギドリなど、後者はクムリ
ーンアイランドカモメなど）

D: 公表された記録が新聞記事以外にないもの、または私信のみのもの。

→8版には検討種・亜種としても掲載しない

*1 さかのぼって判明した分を含む

*2 計測値や画像などの情報をもとに、近縁他種と比較した当該個体の同定理由が明確に示されているもの。図鑑などで当該の分類群の一般的な特徴の解説があるものは不十分と判断した。標識情報で繁殖地などが特定でき、亜種や種について同定が可能なものを含む。

また、第7版の検討種・亜種に掲載されている種、および第7版に未掲載の種・亜種についても同様に、上記の基準で検討しました。また、第7版の検討種・亜種に記載されている種について、根拠となる文献がなく私信のみの種については、検討種からも削除することを提案しています。これらのカテゴリ分けについて、学術報告が存在するが「C」カテゴリになっているなどの問題点があれば、ぜひコメントをいただきたく、よろしく願いいたします。

これらの変更によって、第7版では掲載種となったものの、再び検討種リストに移される種も多く存在します。種同定が正しいと思われるけれども、客観的にそれを明示した文献がないために記録が不採用になるケースは、現在のような文献主義をとり続ける限りは起こりうることでしょう。このようなギャップを少しでも低減するため、日本産鳥類記録委員会では、今後、年次報告書などの形で国内の記録僅少種の記録を取りまとめ、再現性と客観性が確保された記録を出版物として公表していくことを検討しています。この取り組みが開始されるのは目録8版の出版後となる予定で、次々回の目録となる9版の編集に向けたものとなります。

参考文献

- del Hoyo J., A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie & E. de Juana, (Eds). (2017). *Handbook of the Birds of the World Alive*. Lynx Edicions, Barcelona.
- del Hoyo J., A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie & E. de Juana, (Eds). (2020). *Birds of the World*. Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY.
- de Queiroz K., Howard D. J. & Berlocher S. H. (1998). The general lineage concept of species, species criteria, and the process of speciation: A conceptual unification and terminological recommendations, *Endless forms: Species and speciation*, Oxford Univ Press, NY, pp. 57-75.
- de Queiroz, K. (2005). Ernst Mayr and the modern concept of species. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 102(suppl 1), 6600-6607.
- Dickinson, E.C. & L. Christidis (Eds). (2014). The Howard & Moore Complete Checklist of the Birds of the World. 4th ed., Vol. 2, Aves Press, Eastbourne, UK.
- Dickinson, E.C. & J.V. Remsen Jr. (Eds). (2013). *The Howard & Moore Complete Checklist of the Birds of the World*. 4th ed., Vol. 1, Aves Press, Eastbourne, UK.
- Gill F, D Donsker & P Rasmussen (Eds). (2020). *IOC World Bird List (v10.2)*. doi : 10.14344/IOC.ML.10.2.
- Helbig, A. J., Knox, A. G., Parkin, D. T., Sangster, G. & Collinson, M. (2002). Guidelines for assigning species rank. *Ibis*, 144(3), 518-525.
- 池長裕史・川上和人・柳澤紀夫 (2014). I. 日本鳥類目録改訂第7版で新たに掲載された種および亜種の記録等について. 日本鳥学会誌 63: 96-149.
- McCarthy, E. M. (2006). *Handbook of avian hybrids of the world*. Oxford Univ Press, NY.
- 森岡弘之 (2012). 日本鳥類目録の変遷. 日本鳥学会誌 61(特別号): 74-78.
- Tobias, J. A., Seddon, N., Spottiswoode, C. N., Pilgrim, J. D., Fishpool, L. D.

& Collar, N. J. (2010). Quantitative criteria for species delimitation. *Ibis*, 152(4), 724-746.

Vences, M., Guayasamin, J. M., Miralles, A. & De La Riva, I. (2013). To name or not to name: criteria to promote economy of change in supraspecific Linnean classification schemes. *Zootaxa* 3636 (2) 201-244.

山階芳麿 (1949). 細胞学に基づく動物の分類. 北方出版社.

委員長：西海 功

副委員長：金井 裕・山崎剛史

運営委員：小田谷 嘉弥・亀谷辰朗・齋藤武馬・
平岡 考

委員：池長裕史・板谷浩男・大西敏一・
梶田 学・先崎理之・高木慎介